

お わ り に

私たちはだれもが、生まれてから人生のすべてを通じて、「よりよく生きたい」という願いとその実現のために発達し続けている。子どもたちはもちろんのこと、保護者もそして私たち教師も、それぞれの社会的な役割を果たしつつ、PDCAを繰り返しながら自分自身のよりよさを目指して生きている。

私たちは、この「よりよく生きたい」という願いの実現に苦戦しがちな本校の子どもたちに対してこれまでに様々な取組の提案を行ってきた。

子どもたちが学校で学んだことを生活でも生かすためには、社会に「応用」のための協力者のネットワークを作ることが必要である。4年前の公開研究会では、「子どもの生活をつなぐ支援体制づくり」を主題に、実効性のある個別の教育支援計画の在り方を提案した。

前次研究では、これらの支援体制、個別の教育支援計画を生かした「自分のよさやもてる力を発揮する子どもを目指した授業づくり」を主題に授業づくりの在り方を研究した。そして、様々な支援者との連携・協働作業の下、学習環境の整備や教師の働き掛けの工夫の実効性について2年前の公開研究会で提案した。

そして、今回も「授業づくり」である。しかし、今回の研究は基調及びその参考、引用文献から分かるように、「特別支援学校だから」とか、「障害がある子どもだけの」といった研究ではないと考える。教師が、「評価」を軸に子ども一人一人の「確かな学び」の心的過程（ブラックボックス）を絶えず意識し、分析的にとらえた授業を行う。その中で子どもたちは自らのよさやもてる力を実感し、新たな局面にチャレンジしようとする。今回の取組は、障害のあるなしにかかわらず、すべての特別な教育的支援を必要とする子どもを視野に入れたものであると考えたい。通常の学級で苦戦しているすべての子どもたちの支援に共通する視点ではなかろうか。

今回の「確かな学びにつながるための評価の在り方」に焦点を当てた研究の2年が終わる。小学部は自立活動で、中学部は教科別の指導・数学で、そして高等部は様々な指導の形態で仮説の検証を試みた。一応の研究の区切りは付けるが、学部間の確かなつなぎ、それぞれの指導の形態の意義及び十分な実践に基づく検証という点等ではまだまだ多くの課題を抱えている。今後の本校の実践研究の充実のために、多くの方々から忌憚のない御批判、御教示等賜りたい。

最後になりましたが、今回の研究に際し御後援をいただいた鹿児島県教育委員会、鹿児島市教育委員会、また、研究推進のために指導助言のお立場で懇切に御指導くださった岩本伸一先生（鹿児島県教育庁義務教育課主任指導主事）、上國料里美先生（鹿児島県教育庁義務教育課指導主事）、五反田勝先生（鹿児島県総合教育センター特別支援教育研修課特別支援教育研修係長）に御礼申し上げます。また、共同研究者のお立場で日常的に御支援くださった鹿児島大学教育学部障害児教育学科教授 内田芳夫先生、准教授 雲井未歆先生、講師 片岡美華先生、数学専修教授 植村哲郎先生、家政専修講師 黒光貴峰先生に深く感謝の意を表します。

平成21年2月6日

副校長 宮内 英光

研究同人

【校長】新名主健一 【副校長】宮内 英光 【教頭】奥 政治

【小学部】山下 英一	【中学部】土井 靖之	【高等部】加治木 守
高尾 政代	萩之内 靖	松岡 仁志
井上 隆司	☆水野 高明	鎌田 志穂
佐藤美由紀	上温湯 晋	末廣 剛志
☆川添 直人	黒木 里香	☆有田 成志
白土 暢之	☆亀田 純	小野祐貴子
☆中村 麻子	☆初村多津子	☆笹河 博幸
白石 聡子	上屋 文恵	鶴田 智美
久見瀬桂子		西田 雅美

☆：研究部員

【養護教諭】藤迫美由紀

【育児休業中】畑山 直子

【共同研究者】鹿児島大学教育学部

障害児教育学科

教授 内田 芳夫

准教授 雲井 未歎

講師 片岡 美華

数学専修

教授 植村 哲郎

家政専修

講師 黒光 貴峰

【転出】島澤 郎 中島 芳博 鎌田ルリ子 遠矢 博貴 川添さやか

研究紀要 第17集

発行 平成21年2月

発行所 鹿児島大学教育学部附属特別支援学校

〒890-0005 鹿児島市下伊敷一丁目10番1号 Tel 099-224-6257

印刷所 有限会社アト印刷

〒890-0861 鹿児島市東坂元二丁目29番1号 Tel 099-247-1605
